日本記号学会第 43 回大会個人研究発表・要旨

2023 年 6 月 17・18 日
東海大学・品川キャンパス

芸術鑑賞における「共感」―métamorphose を手がかりに

大久保 美紀（情報科学芸術大学院大学）

本研究は、métamorphose（メタモルフォーゼ)の概念を手がかりに、芸術作品の鑑賞経験における「共感」の重要性を再考する。植物の生の哲学を論じた著作で知られる E. Coccia は、昆虫の変態や異種間の形態変異から、捕食・被食や生死までを含む広義の métamorphose を根拠に「あらゆる生はただ一つの生である」と主張する。「人新世」「新しいエコロジー」をキーワードに展開する近年の芸術表現や展示が抱える問題を理解し、私たちと私たちを取り巻くものとの関係を深く思考する上で、芸術的体験における「共感」が果たす役割は重要である。ただし、伝統的な生態学的視点はもちろん、脱人間中心主義やポストヒューマンなどの立場をとる限り、その重要性を十分に発揮することはできない。「生」を異なる視点から思考するエコロジーの美学について考え、翻って私たちの表現行為を理解し直すことが本研究の目的である。

発表者は、これまでの芸術実践および理論研究において、親密な主題に関する芸術的表現は、個の枠組みを超越し、他者によって追体験・共感される局面にこそ意味を持つこと、つまり、「美的共感」は、ある芸術表現がある種の普遍性を伴い鑑賞者に享受されるための重要な要素であることに着目してきた。心理学や社会学の領域における「共感」(empathie)は、人間社会における競争を念頭に置くダーウィニズムの立場では、他者との距離を保ちながら自他を混同することなく他者の感情を理解し、それを共有する能力と定義されるが、本研究ではむしろ、レベルの異なるアニミズム的感覚に基づく経験であると仮定する。言い換えれば、自他が積極的に混同し、自他の区別はおろか、ヒトと他種との区別、生命と非生命との区別すら曖昧である次元においてこそ機能し、それゆえ本質的に「メタモルフォーゼ」的経験と言えるだろう。

本発表ではまず、métamorphose の概念がいかにエコロジー美学に関わるかを明らかにした上で、上述の仮説を実証する芸術実践（展覧会・作品）を参照する。それらの分析を通じて、芸術表現とエコロジーを結ぶ重要な根拠として、美的経験における「共感」を再考する。

参考文献

- Jean-Louis BOISSIER, « Crassula ubiquiste », 2014, 194p.
- Emanuele COCCIA, « Métamorphose », Rivages, 2020, 240p.
- Emanuele COCCIA, « La vie des plantes », Rivages, 2016, 192p.
- Camille DE TOLEDO, « Le fleuve qui voulait écrire », Les Liens qui Libèrent, 2021, 304p.
- (Catalogue) « Nous les Arbres », Fondation Cartier, 2021, 376p.